

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	岐阜聖徳学園大学附属中学校	氏名	河田 康皓
-----	---------------	----	-------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私が今回の研修に参加するにあたっての目標としたことは、生徒に対して「自分が実際に体験したことを伝えていきたい」という想いがある。世の中には多くの情報があるが誰がどのような意図を持って発信した情報なのかを見抜くことは大人でさえ困難である。現に生徒の会話に耳を傾けると、インターネットの情報を真に受け、それ真実であるかの様に国際関係を語る姿に驚かされる。このような現状がある中で、教員という身分の私が生徒と接する上では私自身が様々な異文化に触れ、その体験を実体験として生徒に伝えていくことが大切だと考えていた。担当する英語の授業では、評価項目の1つである「異文化理解」を中心と捉え、異文化理解を進める上で英語の必要性に気付き学習していくという意識を持って行っている。そして今回の研修では個人的に旅行に行くことでは体験できない小学校訪問や、現地の人々の仕事をする姿や思いなど多くの「ガーナ」を直接触れることができた。帰国した現在はガーナで感じたことを一日も早く伝えたい気持ちでいっぱいである。

2. 訪問国から学んだこと (気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

今回の研修に参加する以前はガーナという国に対して知っていることと言えばチョコレート程度であり、世界史の教科書にも多く触れられない国に意識が向くことはあまりなかった。しかし、実際に訪問してみてネガティブなイメージも含めて知識があまりなかったことは多くの物を新鮮に写すには良かったのかもしれないと帰国してみて感じた。最初こそ身構えたものの、待ち行く人々の表情を見ることが出来る余裕が出てくると日本人と同じように笑いながら友人と話しており、同じ地球に住む人間同士たいした違いはなく、言葉や肌の色はちょっとしたアクセントに過ぎないことに気が付いた。同時に食事の面で体内からも変化が出てきた。研修メンバーの中には食事が合わない人もいたようだが、私はスパイシーなガーニアン中華もジョロフライスも体に合い、出発当初の疲れがガーナ滞在中に抜けていき日本にいるとき以上に良い体調で研修を送ることができた。体調の良さは物事を肯定的に捉えるには一番の促進剤であり、おかげで様々なことを興味深く感じて研修を終えることができた。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

国際貢献というと ODA をはじめとした物による支援をイメージすることが多かったが、実際に現地を感じたことは物以上に人で日本とガーナが繋がっていることである。現地でガーナ人のように生活し、ガーナ人のように話し、ガーナ人の様に考える青年海外協力隊やそれをまとめるボランティア調整員をはじめとした

JICA スタッフの活躍を目の当たりにして物以上に、その事業にかかわる人との信頼というものはかけがえないもので結ばれていると感じた。現地学校との交流活動中に子どもの一人が我々の企画した学校での活動で負傷した際には JICA の事業を守るために、JICA スタッフだけでなく現地のカウンターパートが積極的に保護者との間に入り今後にわだかまりを残さないように奔走して頂いた。先進国が途上国に施すだけでなく、共に一つの目標に向かって協力することの大切さを目の当たりにし感謝と共に心を打たれた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

教員という立場である私が、世界が抱える様々な問題を解決していくには、私が今後教えていく生徒達に実体験を元にした生きた知識を身につけさせていくことが必要不可欠になる。その中で私個人が様々な知識や見地を増やすことは必要不可欠であるものの個人では限界がある。そこで JICA が提供する様々な講座や講義を利用することで世界の様々な地域を見て、生徒たちにその地で活動した JICA スタッフの話しを聞く場所を提供することでより深い印象を生徒に与えていきたい。そのように国際理解の素地を中学生の間に養うことで実際に自分で行動を選択できる年齢になった時に目の前のことだけでなく、大きな視点を持つ人材を育成することで少しずつ彼らが「気づき」、「行動」し、そしてその行動でいままで気づいていなかった人々にも「気づき」を促し「行動」移し、またその人々が・・・という様に徐々に大きな動きになっていくことで皆で大きな行動に繋げ、世界が抱える問題をひとつひとつ超えていけるようになっていけるように今後とも生徒に接していきたい。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

今回の研修のように青年海外協力隊や専門員派遣の様に長期でなく休みを利用することで海外に行ける研修は非常にありがたい研修でした。特に旅行では体験できないような現地の人々との交流や、海外の教員と意見交換できる機会は今回のような研修なればこそでした。できるのであれば再び参加したいほどです。

JICA 事業について多くを知るわけではないのですが、各学校で実践している国際理解教育の実践例をまとめたデータベースのようなものが充実していると今後自分が授業を行っていく上で様々な視点からの授業展開の参考になります。私の勤務校は私立のため教員の異動が非常に少なく、色々な先生の実践が入ってくるのが少ないので、参考になる資料や実践例を人伝いに聞くことが難しいためオンラインでアクセスできるものがあると非常に助かります。またこちらも発信する場所として使えるかとも思います。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

② マリナモール

イスラム教の断食明けの祝日ということで当初予定されていたアクラモールが混雑のため時間通りに行動できないこと等を考慮してアクラモールより小規模のマリナモールに行き先が変更になった。入り口には警備員が立ち、バスから眺めていた町の風景とは少し異なり、富裕層向けの商業施設であるように感じられた。3

階建てのモール内にはスーパーマーケットを始めとしてファーストフード店や、小規模ながら薬局や家電のショールーム等がテナントとして入居していた。短時間ながらアクラ市内を車で走っているとサムソンの大きな看板を幹線道路沿いに多く見たが、ここでも液晶テレビやスマートフォンはサムソンの商品が多くなっていた。1階の大部分を占めるスーパーマーケットは日本のスーパーマーケットと変わらない程の商品が並んでいた。しかしながら国内で生産できる物と輸入製品の間には値段の差があり、輸入に頼る現状が推測された。また、サンドイッチのような軽食もなく国内で食品加工という概念が無いのかもしれないと個人的に感じた。(河田康皓)

⑤ 学校訪問 / 青年海外協力隊（小学校教諭）活動

青年海外協力隊の吉田華奈さんが活動されている教育事務所で所員全員での歓迎を受けたのちに徒歩で今回訪問する学校に移動した。我々が来るということで近隣の学校に声を掛けて頂いて100人以上の小学生から中学生が集まった。学校側からはリズム楽器や歌を用いたキリスト教の音楽法要で歓迎してもらい、我々も一緒に踊った。我々からは空手の演舞・幸せなら手を叩こう（現地語）・チェチェコリを披露し子ども達も一緒に踊り歌っていた。その後は日本文化・遊び・体育会系3つの活動に分かれて子ども達と交流した。遊びや運動のもつ根源的な楽しさはどこに行っても同じであり、相撲や折り紙が文化を超えて異文化交流の手段になることは見ていて興味深かった。その後は教員との意見交流会があり、ガーナの未来や教育課題などを聞くことができた。不運にもサッカーの活動中に怪我人が出てしまったが吉田さんを始めJICAスタッフの加藤さんや現地の教育事務所の方々が迅速に事細かに対応してくださり感謝するとともに、現地の人々との信頼を感じた。(河田康皓)

⑪ ケープコースト城

白く美しいケープコースト城は上層になるほど白く美しく、下層になるほど暗く肌に張り付く重い空気を肌で感じる「支配→奴隷」のヒエラルキーを感じさせられた。静かに語りかけるボランティアガイドの言葉で、当時の奴隷として商品として扱われた人の生活する場ではなく倉庫とも呼ぶことができない場所での生活を想像すると、湿度の高く重い空気からは湿度以外の何かによる重さを感じさせ、我々の気持ちまでも重くした。さらには利益だけでなく支配者たちの慾のために扱われ、小さな窓から差し込む光を見上げたであろう女性たちの心中や、望まれずに授かった命のことを想像すると胸が苦しくなった。

日本に住む我々は三角貿易の三角形の外側にしかいなかったが、今回ケープコースト城を訪れたことで三角形のひとつの頂点を知り、非情に利益を追求した結果、非常に合理化が進められたシステムは我々の生きる現代には資本主義社会にと名前を変えて続いており、日本という経済的強者に属している我々は知らず知らずのうちに他の国に無理を強いているのではないかを考えさせられるきっかけとなった。(河田康皓)

⑭ ガーナ由来薬用植物による抗ウイルス及び抗寄生虫活性候補物質の研究プロジェクト

ガーナは西アフリカの医療面では中心的な立ち位置にある国であり、アフリカの伝染病の研究の中心地である。そしてその研究が行われている施設の一部は日本の研究機関の協力で設立された野口記念医学研究所であ

り、国と国以外での国際交流の一環で設立した物だと井戸栄治さんにお話をしていただいた。また交流は施設のみにとどまらず定期的に人事交流で日本の研究機関に受け入れることもしているという。日本からも伝染病と寄生虫の研究をされている鈴木さん夫婦やガーナ由来の植物から HIV ウイルスに効果のある薬剤を研究している堀さんのお話を聞くことができた。折しも西アフリカでエボラ出血熱が流行の兆しを見せ始める時期の中、今まさに伝染病と戦う現場を見ることができた。しかしながらアフリカでの家畜の伝染病を解決すれば世界中の食料事情が大きく改善すると言われながら、利益が出ないために製薬会が大きく動かない現状の話を聞き、1,000 人のアフリカ人がエボラ出血熱で命を落としても動かなかった製薬会社が1人の先進国の為に大きく動いたことに命の重みの違いを感じずにはいられなかった。(河田康皓)

② JICA ガーナ事務所報告会

JICA 事務所に入り初日にも訪れたこと思い出し、あっという間の10日間であり充実した体験に満ちあふれていたことを感じさせるなか、ひとり5分間ずつ研修で学んだことを発表した。多くの方は現地で活き活きと活動する人の魅力に触れ、人と人がいてこそ国際貢献が成り立つことを、身を持って体験したことを話し、JICA スタッフの方々から「これほどの熱い気持ちを持った先生に来てもらえて嬉しかった」「こんな先生に教えてもらいたかった」との感想を頂いた。たしかにアフリカまで来る我々は熱いかもしれないが、そんな我々をさらに熱くして帰国させるのは間違いなく今回であった人々の情熱である。そしてそれを帰国して生徒に伝えることで国際的な視点を持って欲しいと願うことは我々の背負った使命であると自覚した。(河田康皓)

● その他印象に残ったエピソード (ドライバーのアニム)

アクラの飛行場に着き、「頼んでいない人に荷物を積み下ろししてもらおうとチップを請求されることがある」という安全上の注意を受けた後に手配していただいたマイクロバスに荷物を積み込もうとすると何人が寄ってきて「早速きたか」と思うなかで現地調整員の方から「彼は大丈夫」と言われたのが、この研修中に行動を共にし「13人目のメンバー」ともいえるドライバーのアニムであった。集合時間より前にはもう迎えに来て荷物の積み下ろしを手伝い、それが終わると軽い足取りで運転席に駆けていく姿は爽やかで、運転も丁寧でわざわざ写真を撮るためにランドバウトを2周してくれたり、観光施設に入るときに交渉を引き受けてくれたりと細やかなところに気が付き我々の研修を充実したものに導いてくれた。何人か研修の中や研修に向かう道中で現地の人と会話する機会があったが、アニムほど一緒にいた現地の方はおらず彼の運転に身をゆだねることでガーナに対する肯定的な感情が増していき、出会う人々との肯定的な出会いの土台を築いてもらった。(河田康皓)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [KWD_0305]

◇キャプション： ケープコースト城内の祭壇

◇解説文：

奴隷貿易の「集積所」として利用されたケープコースト城内で亡



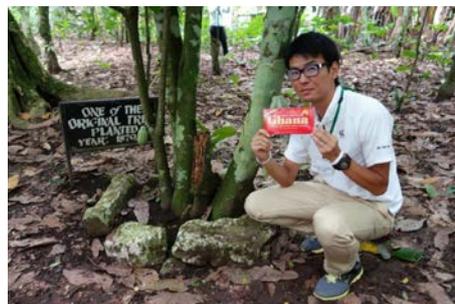
くなった人々の祭壇と、一方的な被害者ではない自国の負の歴史を我々に静かな語り口で過去の過ちを淡々と語るガイド。

●写真2…ファイル名 [FRK_4053]

◇キャプション： 里帰り

◇解説文：

日本のガーナチョコレートがガーナのカカオ農園に里帰りしました。



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

出発前に準備に時間があまり取ることができなかつたのですが事前研修をしっかりと頂いたお陰で持ち物の不安はありませんでした。事前にもう少し「ガーナを知るための47章（明石書店）」を読めれば良かったとも思いましたが、まだまだあまりイメージのわからないガーナについてなかなか頭に入ってこなかつた研修前に比べて、現地や帰ってきてからの方が効率よく頭に入ってくるので時間がない方は行きの飛行機でも読めますので無理に読まなくても大丈夫だと思います。なによりも現地に行くともっと知りたいという気持ちから自然に本に手が伸びますのでご安心ください。私はほとんど事前に能動的にガーナについて調べることができなかつたのですが、逆に受動的に受け取っていた情報から自分の中に造り出されていたイメージが、現地で直接見て感じることでガラガラと壊れていく感覚が新鮮でした。そのような感覚を自分と同じように生徒に与えていくことができればと思います。

研修では10日以上今回の研修で初めて会った人々と移動中もずっと行動を共にすることになります。外国に訪れることは異文化理解に他なりません、まず同行するメンバーと意見交流することも異文化理解だと思います。時間の許す限り海外研修に行く前に互いのバックグラウンドや性格を理解しておく気持ちよく互いの実りのある海外研修を送ることができると思います。そうすることで互いの持ち味を活かし合いメンバーの力が化学変化を起こして大きな力を生むことができると思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修は自分自身の見地を深める事と同時に、生徒に対してどのように国際理解教育を行い、グローバルな人材になるための第一歩を踏み出してもらうことが根底にあった。研修の始まった頃はどのように生徒に指導しようかということに意識が向きすぎて気が付かなかつたが、事前研修から JICA 中部と NIED・国際理解教育センターのスタッフの皆さんは我々をファシリテートする立場に終始し、我々が答えを求めて話し合っているときはニコニコしながら見守っていた。ひょっとしたら本当は答えを言いたくて仕方がなかつたのかもしれない。しかしながら一つの助言で求めるものを引き出し、我々からすれば自分たちの話し合いの中で答えを出せた達成感が残った。研修の後半に差し掛かり少しずつファシリテーターの立ち位置がわかってきた今、現在教員として生徒に接している自分が、今回の研修では普段自分が接している生徒かのように扱われていた事に気がつき「やられた！」と思う一方で、生徒の立場を体感することでいかに「教える」ことではなく「引

き出す」ことが学びを提供する上で有効な手段であるかを実感した。私がいままで生徒と接する中で大切にしてきたことがファシリテーションという方法論で理論立てて示されており、国際理解教育について学んだ以上に学級経営を始めとした指導観に大きな影響を与える研修になった。英語科教員としても異文化理解を指導の柱として据えているので今回の研修は余すことなく私の指導力を向上させるきっかけとなったことは間違いない。もし締め切り直前に学校からこの研修の案内をもらうことがなかったらと思うと、ご縁というに感謝しなければならぬ。

以上